

論 文 内 容 要 旨

A Preliminary Pilot Study : Metabolomic Analysis of
Saliva in Oral Candidiasis

神奈川歯科大学大学院歯学研究科

クラウンブリッジ補綴学分野 足立 拓也

(指 導 : 木本 克彦 教授)

論文内容要旨

近年の高齢化と共に、口腔不快症状の訴えも増加している。我々は口腔不快症状や口腔カンジダ症に対しての補綴治療の有効性を示してきた。特に刺激時唾液量の増加による影響が強いことを報告してきた。先行研究では唾液量のみに着目しており、唾液成分との関連性は不明であった。本研究の目的は、唾液成分と口腔カンジダ症の関連性を探るため、健常者（口腔カンジダ症非罹患患者）と口腔カンジダ症患者を比較し、唾液代謝物に差があるか確認することとした。

本学附属病院に来院した患者 45 名を対象とした。被験者に対しカンジダ菌検出試験により candida 群と control 群に分類した。その後、先行研究より唾液採取日を月・火曜日の午前中と規定した。唾液採取では安静時唾液は吐唾法、刺激時唾液はガム法を用い、それぞれ 15 分間と 10 分間唾液量を計測した。採取した唾液は冷凍保管し、メタボローム解析を行った。統計解析には男女差の検定に χ^2 test、代謝物の検定に Mann Whitney U test を用い、有意水準を 5% とした。本研究は神奈川歯科大学倫理委員会 (No. 380, 891) 承認の下、実施した。

メタボローム解析の結果、ピーク検出率 50% を超える代謝物は 51 種類となった。安静時唾液では全体的に高濃度の代謝物が、刺激時唾液では低濃度の代謝物が多く検出され、差がみられた。candida 群と control 群において年齢・性差に有意差はみられなかった。candida 群では安静時唾液で 5 つ（チロシン、コリン、ホスホエノールピルビン酸、ヒスチジン、6-ホスホグルコネート）、刺激時唾液では 2 つの代謝物（オクタン酸、ウリジンーリン酸）が有意に上昇し、4 つの代謝物（オルニチン、酪酸、アミノペントタン酸、アミノレブリン酸）が有意に減少した。

本研究において有意差の見られた代謝物のいくつかは、カンジダ菌に関連するという先行研究と同じ物質であった。このことから口腔カンジダ症患者に特有な代謝物を特定できる可能性が示唆された。よってスクリーニング検査に応用し、カンジダ症の早期発見、治療に利用するため、さらに検体数を増やし再現性を高めていく必要がある。また、有意に認められた代謝物がカンジダ菌に由来するものか、コントロール群と比較した宿主差によるものか調査し口腔カンジダ症と唾液の関連性をさらに検討していく。